





方丈

この建物は方丈と称し
禅宗様式伽藍の一つで
住職の居室であります
中央にまつられている
本尊様は藤原時代作の
釋迦如来像です。

天龍寺は創建以来六百
五十年間に八回の火災
がありましたが、この
お釋迦様はその火難を
蒙らず現存されている
天龍寺に祀られている
佛様の中で最古の尊い
佛様です。













諸堂参拜入

泰山天



諸堂参拜

太山

天龍寺







達磨圖

前堂長 平四郎 和正



天龍寺略年表

建治元年	一二七五	夢窓疎石、伊勢に生まれる。
嘉元三年	一三〇五	夢窓、鎌倉浄智寺で高峰顯日に参じ、所悟を呈して印可を受ける。
暦応二年	一三三九	八月十六日、後醍醐天皇吉野に崩御。 十月五日、光厳上皇、足利尊氏・直義の奏請により、後醍醐天皇のためにその仙居嵯峨龜山殿を仏閣とし夢窓疎石を開山に請じる。
暦応四年	一三四一	七月二十二日、光厳上皇暦応寺を靈龜山天龍資聖禪寺と改称。 十二月二十三日、足利直義、天龍寺造営要脚のため貿易船(天龍寺船)二艘を元国に派遣を許可する。
康永元年	一三四二	秋、天龍寺船出帆。 十二月二十三日、光厳上皇、幕府の奏請により五十利位を定め、天龍寺を五山第二に列位する。
康永二年	一三四三	十一月、法堂・土地堂・祖師堂・方丈・書院(集瑞軒)・庫裏・三門(普明閣)・外門(天下龍門)・総門(法界門)・鐘樓の他、七十余宇の寮舎成る。
貞和二年	一三四六	十一月二十五日、光厳上皇、夢窓を召して受衣、師資の礼を執られる。翌日夢窓に正覚国師の号を特賜される。
観応二年	一三五一	七月、天龍僧堂開堂。 八月十五日、夢窓、光厳上皇より心宗国師と特賜される。
延文三年	一三五八	九月三十日、夢窓、三會院南詢軒にて示寂。 正月四日、天龍寺回祿、ただ雲居塔・多宝院・龜頂塔・靈庇廟四字を残すのみ。時の住持龍山徳見を再住し、春屋妙葩、造営復興の大勸進職となる。
應安六年	一三七三	九月六日、後光厳天皇、臨川寺三會院に夢窓塔前に拝塔受衣、この日、普濟国師の号追諡される。
至徳三年	一三八六	九月二十八日、天龍寺焼失。
文安四年	一四四七	七月十日、天龍寺を五山第一に列す。
徳二年	一四五〇	七月五日、天龍寺焼く。諸堂悉く焼失す。
寛正二年	一四六一	八月二十七日、開山百年忌、夢窓に仏統国師の号を追諡す。
應仁元年	一四六七	十一月、幕府、天龍寺に勘合符を与え、僧堂造営費を朝鮮に募る。
應仁二年	一四六八	十月、應仁の乱が起こり、天龍寺焼く。
應仁三年	一五八五	九月七日、西山大小刹、兵火に罹り瓦礫場と化す。
慶長九年	一六〇四	十一月十一日、秀吉、朱印状を以て寺領千七百二十石を寄進す。
元和元年	一六一五	十二月二十八日、家康、寺領千七百二十石を安堵す。
寛永二年	一六三五	五山十刹諸山法度の規定を幕府より受ける。
元治元年	一八六四	十一月、対馬以阿庵輪住開始(天龍関係は三代の洞叔寿仙以来三十六回、二十六名選任される)。 七月二十日、薩摩兵、全山悉く灰燼に帰す。

夢窓国師の足跡









